

藤森照信 (東京大学教授・建築史家・建築家)

話を聞いて、これはノアの方舟計画だな、と思った。

映画を見て、これはノアのイカダだと思った。

方舟はアララト山に流れ着き、そこから今の文明は始まったそうだが、イカダは何という山に流れ着いたんだろう。

そして、そこから何が始まったんだろう。

森が丸太になり、丸太が舟になり、舟が山に登る。

スケールの大きさが、見る人の縮んだ気持ちを伸ばしてくれる。

### 五十嵐太郎 (建築評論家)

受け身の引越しは切ない。

森が消え、村が消える。家も田んぼも、すべてが水平に移動し、場所を変える。

しかし、ただひとつ垂直に動いたものがあつた。

それが船である。

伐採された木は谷に降り、船と化し、水位の変動を利用して、山にのぼる。

すべてが水没するとき、船だけは10階建てのビルよりも高く、

希望を背に受けて浮上した。

巨大な土木工事がもたらした現代の神話的な風景。

山頂の船は、村の場所を刻印し、記憶をつなぎとめる。

### 北川フラム (アートディレクター)

「船、山にのぼる」は現代のお伽話だ。

農業の廃棄やダム建設は、地方の切り捨てとセットになっている。

そんななかで地元の人々と紡いだ船の話は、ダムの湛水実験という

極めて土木工学的方法にそつたお伽話と言うしかない。

思えばお伽話は、いつでも棄民される場所に生まれてきた。

これはヘルツォークの映画「フィツカルド」に匹敵する。

ペルーのイキトスのオペラ座のために、船を山を越えて運ぶという話だった。

「船、山にのぼる」は、本当の話でありながら

私にとってはお伽話のように思われた。それが嬉しい。

### 日比野克彦 (アーティスト)

移動と定着

移動することによって産まれるチカラがある、

それが人類を進化させてきた。

定着することによって産まれるチカラがある、

それが地域を育んできた。

移動と定着の繰り返し人と土地を「いとおいしい」ものにさせてきた。

この「船、山にのぼる」は、そんな「いとおいさ」が産まれる時は

はつきりと感じさせてくれる作品だ。

## 「船、山にのぼる」

製作 ビジュアルトラックス / 戸山創作所  
監督 本田孝義  
プロデューサー 伏屋博雄  
撮影 本田孝義、林 憲志、濱子 正  
編集 本田孝義  
音響構成 米山 靖  
音楽 風の楽団  
ナレーター 川野誠一  
支援 文化庁  
2007年制作  
提供：戸山創作所

たくさんの木が、船になって森に戻るまでの話 広島県北東部の山々に囲まれた旧三良坂・吉舎・総領の3町にまたがる灰塚地域。ここにダム建設の話が持ちあがつたのが40数年前。長い建設反対運動を経て美しいダム湖を残すためにダムエリアの再建が始まりました。それが「灰塚アースワークプロジェクト」です。そのひとつがPHスタジオの「船をつくる話」。ダムの建設で20万本の木々が消えることを聞いた建築家と美術家と写真家からなるユニット・PHスタジオは“森の引越し”をテーマとしたプロジェクトを思いつきます。伐採される木で60メートル大の船をつくり、山のてっぺんに移動させる壮大な計画。それが12年にわたる大仕事の始まりでした。映画はこのアートプロジェクトを静かに見守ります。

DVD ON SALE ¥2,400(税抜き)

DVD特典 オリジナル劇場予告編 / 小冊子(40P)



RELEASED BY BankART 1929

<http://www.bankart1929.com>